

日女薬カレントニュース第 20 号 ご紹介

＜特別寄稿＞（抜粋）

COVID-19 流行下のウイルス感染症の動向

東邦大学名誉教授 村井貞子氏

我が国でデルタ株の流行がやっと落ち着いた 11 月 26 日に、WHO は 24 日に南アフリカから最初に報告されたスパイク蛋白質に 30 か所の変異を持つ SARS-CoV-2 変異株を、感染性の強さなどを懸念してオミクロン株と命名し、VOC(懸念すべき変異株)に指定しました。28 日には国外の情報とリスク評価に基づき日本でも VOC に指定しています。本稿作成中にも、海外からの入国者のオミクロン株確認の報告が続いており、市中感染の確認も相次いでおり、急速な流行の拡大が進んでいます。何時、水際から漏れ出すか解らないオミクロン株、そして今は、何処にいるのかも解りません。ワクチン接種・追加接種による抗体獲得と基本的な感染予防策(マスク、手洗い、換気、ゼロ密)の徹底を欠かす事はできません。

前回の寄稿では、COVID-19 流行下のインフルエンザについて述べましたが、他のウイルス感染症に関しての状況を調べるために、IDWR 感染症発生動向調査 週報 (nih.go.jp)²⁾をめぐり、過去 5 年間の各月ごとの平均報告数の標準偏差の値と'21 年の報告数の関係を見ました。

* **インフルエンザ** :インフルエンザを対象とする定点医療機関(約 5000 か所)からの報告数は昨年同様に 49 週(12/6~12/12)ではまだ例年より少なく、毎年増加が始まるこれからお正月にかけてどうなるか、注目されます。

一方、今年の冬になって例年より多く報告されているのは、手足口病、ヘルパンギーナであり、疾病の概要と発生の状況をご紹介いただきました。

* **手足口病とヘルパンギーナ**は共に夏にはやる乳幼児の感染症と考えられているのですが、'21 年の流行は秋から冬にやってきました。COVID-19 の流行の続いた夏場に、これらの流行が見られなかった理由は、20-21 年のインフルエンザ流行期に、流行がなかったと同様に日本人の清潔習慣(特に手指衛生、マスク)の徹底との関連であったかもしれませんが、秋から冬にかけ流行するという事の理由はよく解っておりません。現在の流行の行方と子供たちに与える今後の影響が注目されます。

感染予防や患児へのケアで注意する点などの詳しい解説については、日女薬カレントニュース第 20 号(2022 年 1 月配信)の特別寄稿をご参照ください。

→ イラストは参拝をするアマビエ

